

日本言語政策学会優秀論文賞

# 小学校の外国語指導助手（ALT）はモノリンガルか —单一言語教育に従う複言語話者の位相—

ピアース・ダニエル ロイ

Daniel Roy PEARCE

四天王寺大学教育学部講師

21世紀の外国語教育は変化期にある。従来の日本の外語教育は、海外の文献を読むための読み解きが中心であった。その中の言語のモデルは、いわゆる「ネイティブ（=母語話者）」の使用する言語であった。しかし、20世紀末にグローバル化が意識され始め、コミュニケーションのための口頭能力が重視されるようになり、「ネイティブ」をモデルにすることが疑問視され始めた。

「ネイティブ」とは、対象言語の「標準語」しか話さないモノリンガル（=単一言語話者）という意味で用いられてきたが、グローバル時代の外語のモデルとして不十分である。なぜなら、例えば日本の英語学習者が想定するコミュニケーションの相手は、多くの場合、英語母語話者ではない。そのような相手とコミュニケーションをうまく図るには、言語の表面的要素である語彙と文法だけでは足りない。少なくとも、英語変種の発音の違いや、相手の文化的背景に対するある程度の知識（=メタ言語知識と呼ばれる、言語・文化についての知識）も必要になる。文部科学省もこのことを、

外語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら [...] コミュニケーションを図ろうとする態度を養う。（文部科学省、2017：156）

として、外語科の目標の一つに挙げている。

実のところ、多くの教育実践者が、英語のみではなく「複言語教育」のアプローチを採用し始めている。複言語教育は、特定言語の習得だけでなく、言語そのものについて学ぶこと、つまり、（特定の言語習得をも支える）メタ言語知識の育成も重要視される。言語の観察・比較を通して、個々の言語機能に対して仮説を立て検証するのが一つの学習形態である。このような活動に複数の言語変種を取り入れることが多い。

複言語教育の観点から行った本研究の動機は極めて単純だった。複言語教育に貢献できる貴重な存在として、すでに外語教室にいる外語指導助手（Assistant Language Teachers: ALTs）の存在を真に示すことであった。ALTはもともと英語圏のみから招聘されたが、小学校への外語の導入に伴った需要向上により、現在は言語・文化的に多様な集団になっている。しかし、今までの ALT 研究はその豊富な言語・文化的知識をないがしろにしてきた。そこで、まず、ALT の言語文化的な背景を外語教育に活か

すのに、その背景を知る必要があると考え、「① ALT の使用できる言語を把握すること ② 複数言語能力を持つ ALT の指導経験と教育的信念を知ること」の二つの目的で 181 名の ALT にアンケート調査を行った。結果、6 割近くの ALT が複数言語を使用できることが判明した（図 1）。バイリンガル研究から、2 言語以上使用できる人が世界の過半数を占めていることが知られているため、調査結果は意外ではなかった。

しかし、これらの言語を教室で使用しているかという設問には、8割近くが「全く使わない」か「ほとんど使わない」、「あまり使わない」と回答している。また、インタビュー調査から、自ら英語以外の言語能力を隠す ALT もいることが判明した。これは、英語の口頭能力のみが重視されてきた結果と思われる。一方、他の回答者からは、

大事なのは、[複数の言語と文化を使用しながら] 言語を学ぶための方法を教えることだと思います。 [...] 好奇心を育むべきで、言語習得のスキルを育むべきなのである。

というように、複言語教育の趣旨にも合った「メタ言語知識」の育成の観点からより積極的に複数言語・文化を教室活動に取り入れたいという声もあがっていた。本研究はあくまでも、ALT の複言語を活かす教育への第一歩であり、その実現方法を探るのが次の課題と思われる。

著者は現職で、教員養成課程の学生とともに、複言語教育と ALT との実践について色々な教育アプローチを考えている（例えば、大山他、2022）。今後も、多様な背景を持つ話者とコミュニケーションが取れる生徒を育成すべく、次世代を担う将来の教員とともにより多くの言語・文化に開かれた教育実践へ貢献をしていきたい。

## 参考文献

- 大山万容、ピアース・ダニエル ロイ、北野ゆき、藤田恵美子（2022）「食育と外語教育をつなぐ給食プロジェクト」『複言語・多言語教育研究』9, 17–32.



図 1 ALT の使用できる言語